

人間中心の社会を実現する AI特集に寄せて



理事
横田 潔

AI (Artificial Intelligence:人工知能)という言葉がいつからこのように身近なものになったのでしょうか。この言葉を目にしない日はありません。しかしAIの実態が掴みきれず、社会に期待と不安の入り混じった気持ちを引き起こしているという印象も強く受けます。

AIの光と影

人類は道具を発明することにより進化し、さらに科学技術を発展させることにより自らの能力を拡張し、また自らが生きる環境を自分たちにとって都合のよいものに変えてきました。それにより過酷な環境、厳しい労働から解放され、より安全で豊かな生活を送れるようになってきました。SDGs (Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標) はそのような安全・豊かさを、先進国にとどまらず、地球上の誰一人として取り残されることなく受け取ることができる社会を2030年までに実現しようとする、国連サミットにて全会一致で採択された国際目標です¹⁾。この目標達成のために、近年急激な進化を遂げるAIが果たす役割に大きな期待がかけられています。AIはその定義が多様ですが、「識別」「予測」「実行」という機能をこれまでの機械にはできなかった高いレベルで実現します。これにより画像・音声認識精度の飛躍的向上、各種機器の最適制御、自動運転技術の進展など、多くの分野で効率的で無駄のない社会の実現に貢献しています。またその進化のスピードが指数関数的であり、社会に与える影響はこれまでの科学技術に比べて非常に大きなものとなっています。

一方、科学技術の発展はこれまで慣れ親しんできた生活を変えろという側面もあるため、人々に不安をもたらします。19世紀の産業革命期にイギリスで起こったラダイト運動はその一つです。これは産業革命に伴う機械の普及により失業のおそれを感じた手工業者・労働者が起こした機械破壊運動です²⁾。最近ではAIが既存の職業を人間から奪ってしまうのではないかと、という同様の不安が広がって

います。また、与える学習データの質によってはAIが人間にとって好ましくない結果を出力するという事例も報告されています。さらに、AIの能力向上に大きく関係する個人データを一部の巨大企業が独占することによる弊害の発生など、人類はまだこのAIという技術を自らの進化のために十分に使いこなせていない状況にあると感じます。

渋沢栄一と「論語と算盤」

渋沢栄一という人物が俄かに脚光を浴びています。幕末から明治維新という価値観が大きく転換する社会の大変革期を、尊王攘夷の志士、幕臣、明治政府の官僚、実業人と、時代の変化に合わせて柔軟に立場を変えながら生き抜きました。実業人としては、約470社の会社の設立および500以上の慈善事業にも関わった「日本資本主義の父」と呼ばれる人物です。この渋沢栄一の講演での口述をまとめたものが「論語と算盤」です³⁾。甲子園で活躍した高校球児の愛読書としても有名になりました。

「算盤」という言葉で象徴されている資本主義は、利益を増やしたいという欲望をエンジンとして前に進めるものであり、そのエンジンが暴走し大きな惨事を引き起こす可能性があります。健全な社会の発展のためには、その暴走に歯止めをかける枠組みが必要であり、その手段となるのが「人はどう生きるべきか」を記した「論語」の教えとなります。実業人はその両方をバランスよく両立させることが必要である、というのが渋沢栄一の「論語と算盤」の考え方です。

現代においても、日本における1980年代後半からのバブル景気とバブルの崩壊、米国における資本主義がもたらす行き過ぎた格差による社会の歪の発生など、資本主義の暴走を示す事象が顕在化しています。現代の私たちが未来に向けてどのような経済社会を目指していくかを考えるうえで、「論語と算盤」の考え方には時代を越えた変わらない価値があります³⁾。

論語とAI

現代では資本主義のみならず、科学技術も暴走する可能性が大きくなっています。特にAIに関しては人間の能力、知識、知恵を超えた進化を遂げ、人間の制御が効かなくなる事態が発生することが危惧されています。このような状況において日本政府は、AIに関する各種ガイドライン、戦略などの策定を進めています。日本のAIに対する投資・研究開発・人材は、米国、中国などに比べて現状では遅れをとっていますが、特に「人間中心のAI社会原則」の策定により、AIを有効かつ安全に利用できる「AI-Readyな社会」を世界に先駆けて構築し、国際的な議論の場で我が国がリーダーシップをとることを目指しています⁴⁾。

このAI社会原則の実社会への適用においては、基本理念の一つである「人間の尊厳が尊重される社会」の具体像を描くことができ、また「AI-Readyな社会」構築の鍵となる「何のためにAIを用いるのか」という目的設定ができる「人」の存在が重要と考えます。単に仕組みを作るだけではなく、AIに関する政策、研究開発、社会実装に関わる全ての人およびその利用者が、AIの技術的な知識と共に、「人はいかに生きるべきか」、「自分はどうか生きていか」など、人間に対する深い洞察を持つことがより求められる社会になるのではないのでしょうか。明治以降の資本主義の暴走を抑え健全な経済発展のために「論語」が必要であったように、現代の科学技術の急激な変化が暴走につながらないようにするために、「論語」をはじめとする人間という存在を理解しようとしてきた先人の知恵に立ち返り、さらに発展させることが求められます。AIという技術を人間が主体性を持って適切にコントロールすることにより、AIが持つ可能性を最大限に活用した人間にとって幸福な社会が実現できることを願っています。

おわりに

人間の能力を凌駕する急激なAIの進化により、「自分自身が何者であるか」という問いにより多くの人が直面する状況が生まれています。これをきっかけとして人間の意識・思想もAIに負けずに高めることができれば、人間とAIの適切な共存・融合が実現するものと思われれます。その実現のために渋沢栄一が説いた「論語と算盤」の考え方を現代社会においてAIに当てはめて考えてみることは意味があることではないのでしょうか。

OKIはその創業期に渋沢栄一が関わった会社の一つです。渋沢栄一の想いと志を忘れることなく、人間とAIが共存・融合した幸福な社会の実現にOKIは貢献していきます。



渋沢栄一、資料提供：渋沢史料館

参考文献

- 1) 外務省、Japan SDGs Action Platform
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html> (2019年4月1日)
- 2) ラッダイト運動(フリー百科事典「ウィキペディア」)
- 3) 渋沢栄一著、守屋淳訳:現代語訳 論語と算盤、筑摩書房、2010年
- 4) 内閣府:人間中心の社会原則(2018年12月27日案)
https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/humanai/ai_gensoku.pdf